

朝鮮三国王都の変遷

田中俊明

滋賀県立大学

はじめに

朝鮮三国とは高句麗・百済・新羅の3国を指す。いずれもその政治・文化・経済・軍事の中心は、王都であり、そこには当然、王が居住し政務を執る王宮があった。ここでは、これら3国における王都の変遷を概観し、その東アジアの中での位置づけについても言及したい（図1）。

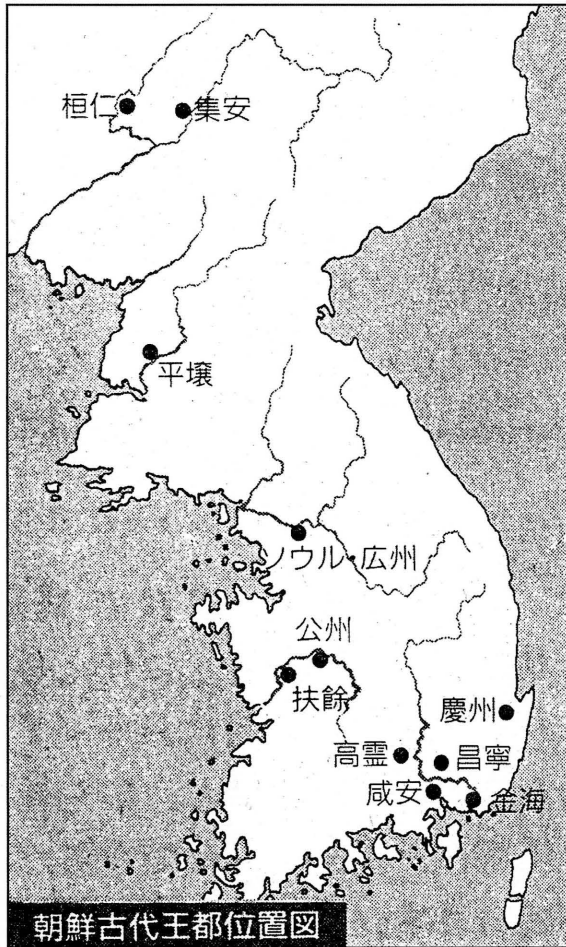


図1 朝鮮古代王都位置図

1. 高句麗の王都

まず高句麗であるが、高句麗の700年をこえる歴史は、王都の変遷を通して、次の3期に区分することができる。

前期 卒本時代

前1世紀初～後3世紀初

中期 国内時代

3世紀初～427年

後期 平壤時代

427年～668年（滅亡）

このうち後期は、さらに二つに細分することができ、前半を前期平壤城、後半を後期平壤城または長安城時代、とよぶ。長安城遷都は586年である。

（1）前期－卒本時代

高句麗の伝統的な都城制として知られるのは、平地における王の居城と、その背後における逃げ城としての山城とのセット関係である。そのことは、『周書』巻49・高麗伝に、

平壤城に治す。其の城東西六里。南は溟水に臨む。城内には唯だ積倉儲器し寇に備え、賊至るの日、方めて入りて固守す。王は則ち別に宅を其の側らに為り、常には之に居らず。

とあることによってわかる。これは直接には、前期平壤城について述べたものであるが、前期（卒本）・中期（国内）にもそうであったことが確認されてきている。

まず卒本であるが、これは建国の神話にも登場する伝説の都といってもよい。ただし後3世紀まで存続したのであるから、伝説にとどまらず、現実の地と無関係ではありえない。現在の中国遼寧省桓仁県にあたる。近年特に、遺跡の分布調査や発掘調査がすすみ、実態がしだいに明らかになりつつある。

高句麗の碑文として広く知られる「広開土王碑」によれば、高句麗の始祖鄒牟王は「沸流谷の忽本の西に於て山上に城きずきて都を建つ」とあり、その忽本が卒本と同じとみられる。卒本という表記は、朝鮮の現存最古の歴史書『三国史記』にみえるもので、そこは沸流水のほとりにあったとする。

この山上の城と知られるのが、桓仁の五女山城である。五女山は玄武岩の屹立する岩盤で、その相貌は見る人を畏怖させる。頂上部は平坦で、特に防御施設を必要としないが、岩盤の亀裂する登りやすい所に、少し石組みをしている。城壁はそこから100mほどさがった東側のみに築いており、延長約1kmほどになる。1996～1999年、および2003年に、頂上部の城内が発掘調査され、建物址も検出された。遺構・

遺物はおおよそ5期に分けられ、そのうちの第3期が紀元前後、第4期が4世紀末から5世紀初と考えられる⁽¹⁾。特に、第3期が、高句麗建国の時期に近く、その草創期から城内が用いられていたことを知ることができる。

この山城の東側に卒本があったということになるが、候補地として、富爾江と渾江との合流点あたりが考えられる⁽²⁾。富爾江は沸流水にあたりとみられ、その名が残ったものと思われる。合流点近くには、蝸哈城とよばれる方形の石城がある(図2)。一辺約200mの小さい城である⁽³⁾。高句麗には方形の城を造る伝統がなく、おそらく漢の武帝が玄菟郡を置いたとき、その一県城として造営されたものとみられる。中期に都となる吉林省集安市にも大型の方形石城があるが、1975~77年にかけての断面調査の結果、芯の部分に土塁があったことがわかった。つまりもとは土城で、のちに上を石で覆ったということである⁽⁴⁾。石城に改築したのは高句麗人であるが、もとの土城は、玄菟郡の県城と考えられる。それと同様に、蝸哈城もほんらいは土城で高句麗人が石築したのではないだろうか⁽⁵⁾。現在はダムのために水没しており、渇水期には顔をのぞかせるというが、調査は困難であろう。

このように想像をして、わたしは、高句麗の前期王都が、蝸哈城と五女山城のセットで成り立っていたと考える。富爾江の流域は、高句麗の前史を考える上でも重要な小荒溝遺跡があり、また寺廟かとされる東古城子遺跡もある。後者は、あるいは始祖を祀る廟で、高句麗王が遷都後もしばしば訪れたものにあたるのではないかと思う。

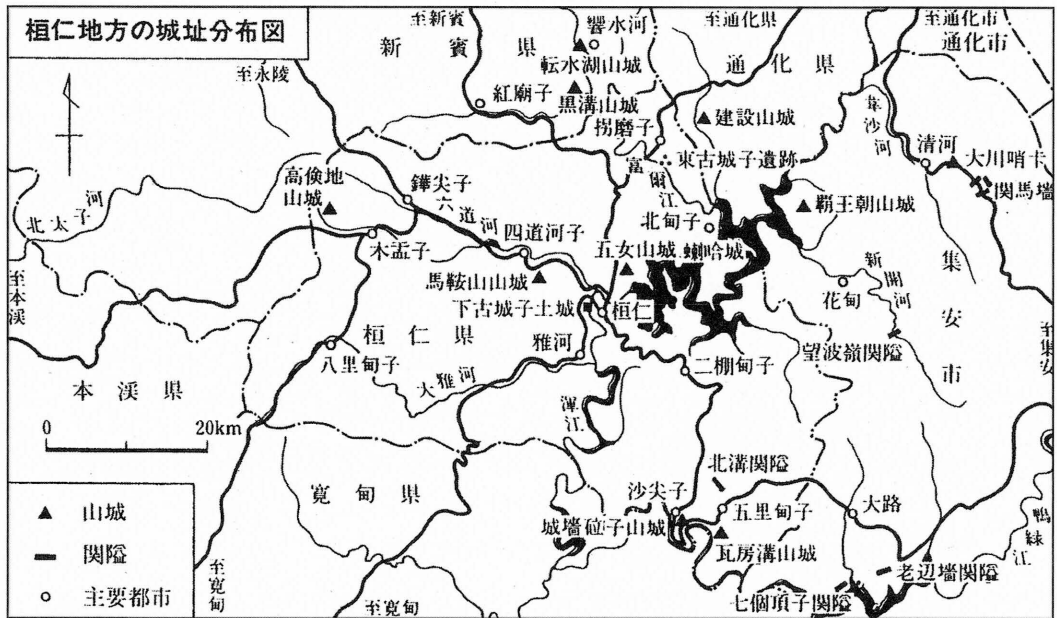


図2 桓仁地方の城址分布図

そうであれば、先にふれた高句麗の伝統的な王都のありかた、すなわちふだんの居城と、外敵侵入の際の山城のセットが、前期からみられることになる。高句麗の興起は、自分たちの住地に漢が郡県支配を及ぼしたことと大いに関わっており、それに対する反抗や、またそれから倣った政治的・軍事的・文化的影響によって、成長したものである。そして支配勢力を撤退させ、県城を奪取して、自分たちのものとして転用したのであり、その時期を高句麗の興起ととらえることができる。従って、高句麗にはその当初から、方形の土城が存在したことになる。

(2) 中期一国内時代

国内への遷都は、『三国史記』では、紀元後3年のこととするが、『魏志』高句麗伝による限り、3世紀初めのこととみななければならない。抜奇と伊夷模の兄弟で王位をめぐる争いがおこり、人々が弟を王にしたところ、兄はそれを怨んで遼東に勢力をもっていた公孫康に降り、その援助を得て弟に対抗した。そのため弟は「更めて新國を作る。今日の在る所是れなり」とある。この「今日の在る所」とは、魏が攻撃し陥落させた王都であり、集安を指すことが確実である。従ってそれまでは、集安以外のところにいたことになる。兄はもどって「沸流水に住」んだが、それは前期王都であると考えられる。すなわち、前期から中期への遷都は伊夷模の時代で、公孫康の時代でもある。公孫康は204年に父度のあとをついでおり、それよりあとであるから、3世紀初ということになる。

中期王都は、丸都ともいう。『魏志』では「丸都の下」としており、丸都は山の名とみるべきであるが、王都の名であるかのように誤解され、それが定着していった。高句麗固有のよびかたは、国内城である。

国内城が集安にあたるということは、直接には、魏の侵攻の際に、司令官であった毋丘儉が残っていたという紀功碑の断片が、1906年に集安のすぐ西の板岔嶺から見つかったことによるが⁽⁶⁾、集安には「広開土王碑」や將軍塚・大王陵をはじめとする無数の積石塚が散在しており、まったく問題はない。桓仁と集安とは、高句麗の当初からの二大根拠地であり、中心地であった。遷都後に盛んになったというのではない。むしろ集安のほうが、前期においても有力であったと見るべきかも知れない。しかし最初の都は、桓仁のほうが選ばれた、ということである。

中期王都における平地の居城が集安市内にある通溝城（現地では、「国内城」とよんでいる）にあたることは、問題ないと思われるが、周長 2,738mであり、王宮のみが中にあったということではなく、住民もその中に住んでいたと考える必要がある。通溝城の城壁は、集安県が成立した1902年（当時は輯安）以来、修築されて県城として利用されたが、その後市街地が広がって、多く破壊された。北壁はよ

く残っているが、東壁はほとんどなく、西壁や南壁の一部は、住宅の基礎に用いられたりして残っていた。近年、整備され、西壁のほとんどは、住宅の撤去等によって、全体をよく見ることができるようになった(図3)。その城内で、いくつかの遺構が確認されているが、市街地にあたり、系統的な調査は行われていない。発掘された遺構のうち、特に城内中心部に位置する体育場地点では、4棟の大型建物址が検出されており、最大のもは20m×30mを超える礎石建物であった。このあたりが、王宮と関わるものではないかと想像される⁽⁷⁾。

これとセットをなす山城は、山城子山城である。通溝城からは、西北約3kmである。周長6,951mの巨大山城であり、現在も特に北側の石築城壁がよく残っている。いくつかの峰を結びながらも、大きく谷をとりこんで、城壁はほとんど平地までおりてくる、典型的な高句麗山城である。正門にあたる南門およびその周囲は、発掘調査され、整備された。城内では、これまで3ヶ所の建物址が確認されている。そのうち2号・3号とよばれていたものは、瞭望台という城内の展望台的な石築の施設と、それに隣接する、戍卒居住施設とされる。1号建物址は、緩やかな傾斜面を整地した平地に礎石が散乱し、瓦当や瓦類が散布していたところで、発掘の結果、

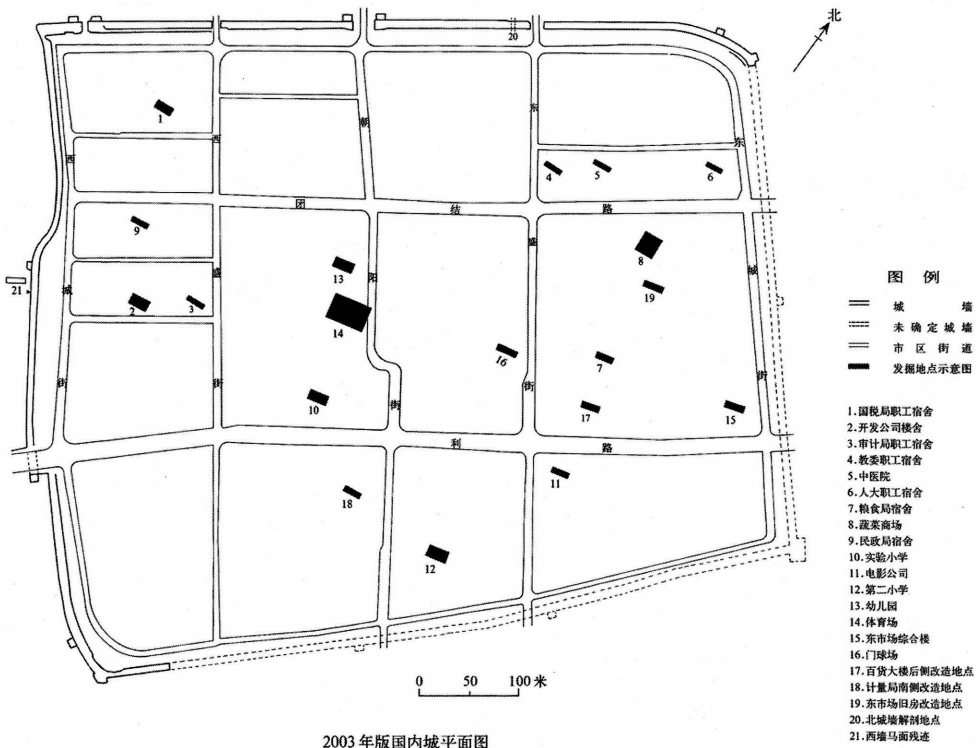


图3 国内城平面图

南北 95.5m, 東西 86.5mの墻壁で囲み, 2ヶ所の門があり, その中を4段に造成して, 各段に長大な礎石建物址を配し, また八角建物址が配置されていた⁽⁸⁾。宮殿遺構ではないかとみているが, 常住の王宮ではないであろう。

以上の前期・中期王都は, とともに平地の居城と, その近くに山城とのセットからなるもので, 高句麗の伝統的な王都の構造をもつといえるが, そもそも平地の居城は, 漢の県城を奪取し転用したもので, 計画的にそのような構造をめざしたというよりは, 結果的にそうなったというべきであろう。

(3) 後期一平壤時代

広開土王の領土拡大を経て, 高句麗は427年に平壤遷都を敢行する。その当初の王都は, 現在の平壤市街地ではなく, 東北郊外にある大城山城とその近くの清岩里土城の一带であった(図4)。そのあたりも平壤の一部であり, 当時も平壤城と呼ばれた。ここでは前期平壤城とよぶ。高句麗滅亡後は, そのことが忘れられていき, 李朝時代においては, 平壤遷都といえば, 当然のように, 現在の市街地(当時の平壤府)が想定された。それを正しい認識に変えたのは関野貞であったが⁽⁹⁾, 王宮址と推定した清岩里土城の中の最も多量に瓦の散布するところが, その死後1938年に発掘され, 寺址であると確認された⁽¹⁰⁾。朝鮮民主主義人民共和国の学界では, そのこともあって, 大城山城のすぐ南麓にある安鶴宮址という宮殿遺構を, 前期平壤城の王宮址であると考えている⁽¹¹⁾。しかしそこに散布する瓦はほとんど高麗時代の瓦

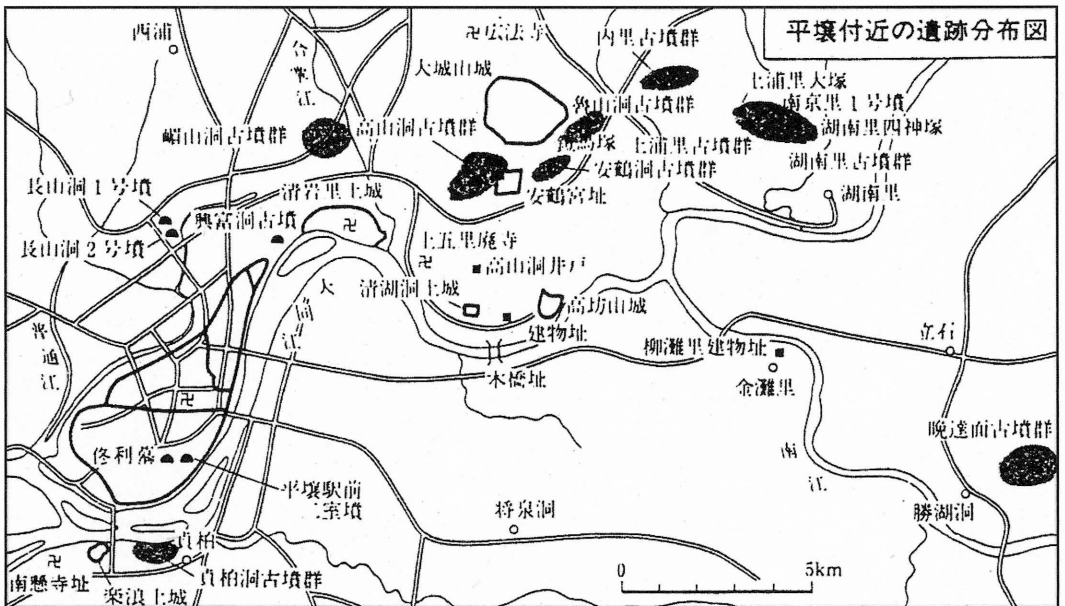


図4 平壤付近の遺跡分布図

であり、また宮殿遺構の下層には5世紀後半の石室墳の基底部が残っている。つまり古墳を破壊して造営されているのである⁽¹²⁾。従って、どう考えても前期平壤城の王宮とは考えられない。わたしは高麗時代の1081年に造営された左右宮のうちの左宮が該当するのではないかと考えている⁽¹³⁾。平壤は高麗時代の王都ではないが、高句麗の都のあったところとして西京とされ、王もしばしば行幸した。そのための行宮がいくつも造営されている。城内に寺址があっても、5世紀の瓦が出土する清岩里土城のほうが、平地の居城にふさわしいと考える。

清岩里土城は、一部丘陵地帯を含み、自然地形を利用した城壁もあるが、周長約5kmある。寺址以外にも瓦の散布地はあるが、城内には主席宮や迎賓施設などがあり、発掘調査は行われていなかった。しかし1995～97年にかけて城壁および城内の発掘調査が行われた。その詳細はまだ紹介されていないが、城壁は上下二層あり、下層は高句麗をはるかさかのぼる檀君時代のもので、上層が高句麗時代のものとする。また城内では3棟の建物址が検出されたという⁽¹⁴⁾。

大城山城は、周長7,076mにおよぶ巨大山城で、やはり連峰式・包谷式である。1958～61年にかけておよびその後も、発掘調査が行われ、二つの調査報告が公刊されている⁽¹⁵⁾。ただし城壁や城内の池の発掘が中心で、建物址の発掘は将台址とみられる2ヶ所にとどまり、山城の全容はまだよくつかめない。瓦などの出土遺物からみれば、前期平壤城の山城として問題はない。

この大城山城一帯から、平壤市街地に移ったのは586年で、それ以後を後期平壤城とよぶ。20世紀初まで、市街地には四つの部分に区画される城壁が残っており、あわせると23kmにもおよんだが、その後の開発・戦災・復興などでほとんど消滅し、現在は一部が残るのみである(図5)。ただし四つの区画のうち中城壁とよぶ東西方向の城壁は、高麗時代に広すぎる外城を切り捨てるために築いたもので、高句麗時代には内城・外城と北城の三つの部分であったと考えられる⁽¹⁶⁾。

城壁には文字を刻んだ城石があり、これまで5点知られている。それは城壁工事の責任者を明示し、工事に責任をもたせたもので、工事開始日・工事区間・距離なども記している。それを通して、城壁工事の経緯を考えることができ、566年に内城、589年に外城を築いていることがわかる。遷都の計画は552年に決定され、遷都は586年であるから、選地・整地などを経てまず内城を築き、遷都後に外城を築いたのである⁽¹⁷⁾。その点からも内城が重要であったとみられ、王宮の第一候補である。内城は丘陵地帯であり、現在も万寿台議事堂などがあるが、高麗時代には行宮の中心、李朝時代には平壤府の官衙が置かれていた。それに対して外城は、条坊制の痕跡も確認され、一般民の居住空間であると考えられる。北城は離宮であろう⁽¹⁸⁾。

条坊制については、不整形な外城を区画するため不規則ではあるが、12.6～12.8m

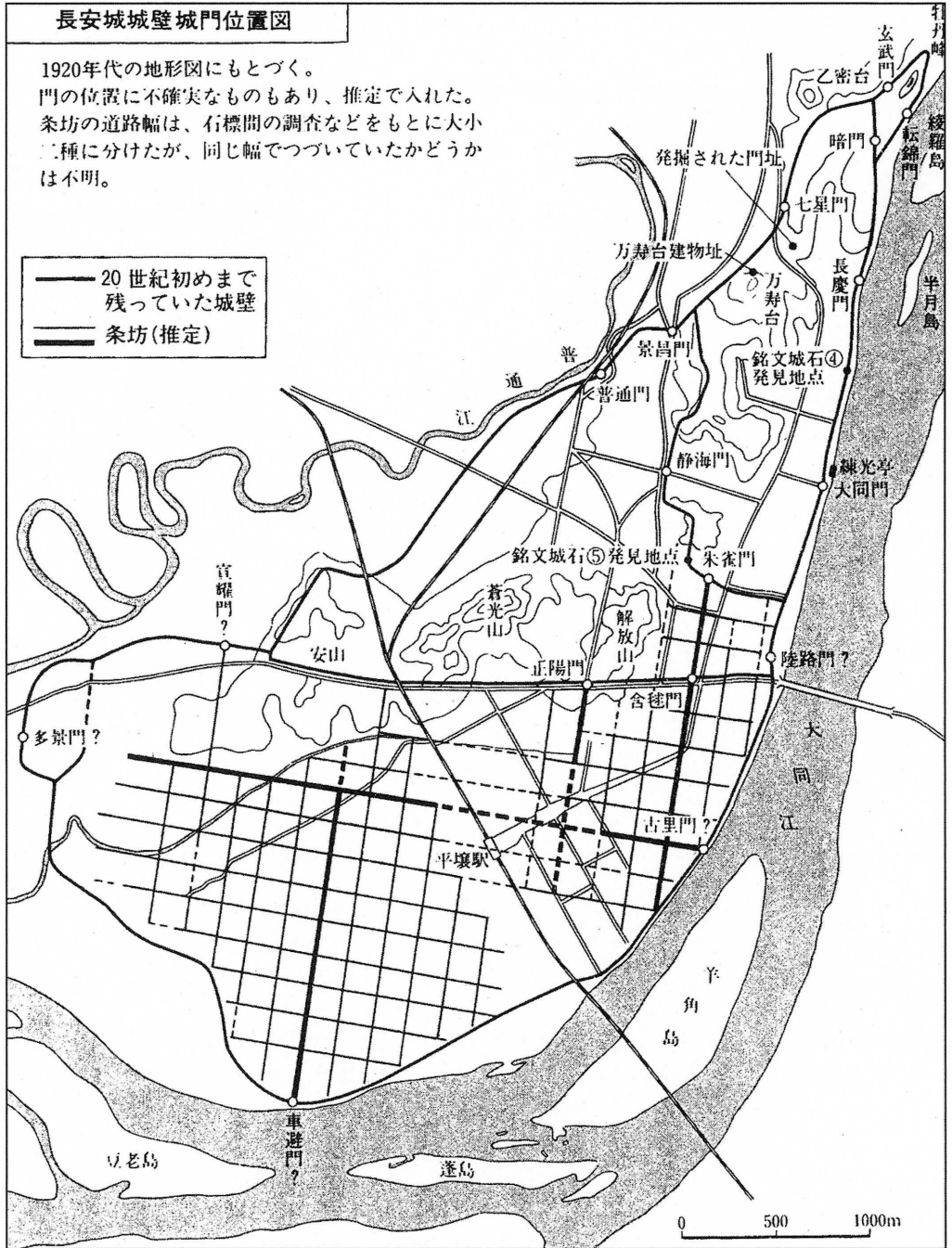


図5 長安城城壁城門位置図

の大路が南北に3本，東西に1本走り，その中を4.2mほどの中路が通っている。大路には両側に60~70cmの側溝がある。さらに計算上，幅1.4mほどになる小路が

中路で区画された中をさらに四分していたことになる。大路には発掘で確認された箇所もあり、中路には両側に道路界を示す石標がかつて立っており、それを通して確認された箇所が多いが、小路は確認されたわけではない⁽¹⁹⁾。

以上のように、高句麗の王都は、卒本・国内・平壤と変遷したのであるが、平壤時代の後半になって、それまでの伝統を打ち破り、王宮と住民の居住空間とを大きく囲む城壁（外城と内城の外側部分。羅城）が築かれ、条坊制も施行されたのであった。こうした羅城・条坊制は、中国的な要素ということができ、最後の段階になって中国的な都城づくりがめざされたといえる。高句麗と北魏の密接な関係からすれば、その都洛陽の影響をうけたものと考えられる。ただし地形にも制約され、また伝統にも制約されたかたちの中途半端なものであった。

2. 百済の王都

百済も、やはり王都に即した時期区分をすれば、次のようになる。

前期 漢城時代

?～475年

中期 熊津時代

475年（実質は477年）～538年

後期 泗沘時代

538年～660年（滅亡）

このうち前期は、さらに細分することができる。『三国史記』には、371年を境に、慰礼城から漢山へと移動があったことを伝える。実をいえば前期については、史料的に複雑な遷都関係の記事があるが、わたしはそれを整理した上で、371年の遷都のみを認めることにする⁽²⁰⁾。慰礼城も漢山も、同じ漢城地域にあり、またともに漢城ともよばれた。また『日本書紀』では、漢城陥落の記事で「慰礼を失う」としており、慰礼の名が最後まで残っていたことがわかる。慰礼城も漢城も、大城という意味で同じであるという意見があり、慰礼城・漢城・漢山城などの名が一貫して使われたのであろう。ここでは、あわせて漢城時代とよぶ。

（1）前期—漢城時代

漢城は、現在の韓国の首都ソウルにあたる。ただし、ソウルを流れる漢江の南側、いわゆる江南の地であり、かつては広州郡に属した。『三国史記』の伝える百済の建国伝説では、紀元前18年に、高句麗から南下した始祖温祚が「河南の慰礼城」に都を定めて百済を建国した、とする。『魏志』には、百済の前身である伯济国の名が馬韓の一国として知られ、実際の「建国」はそれ以後とみるべきである。

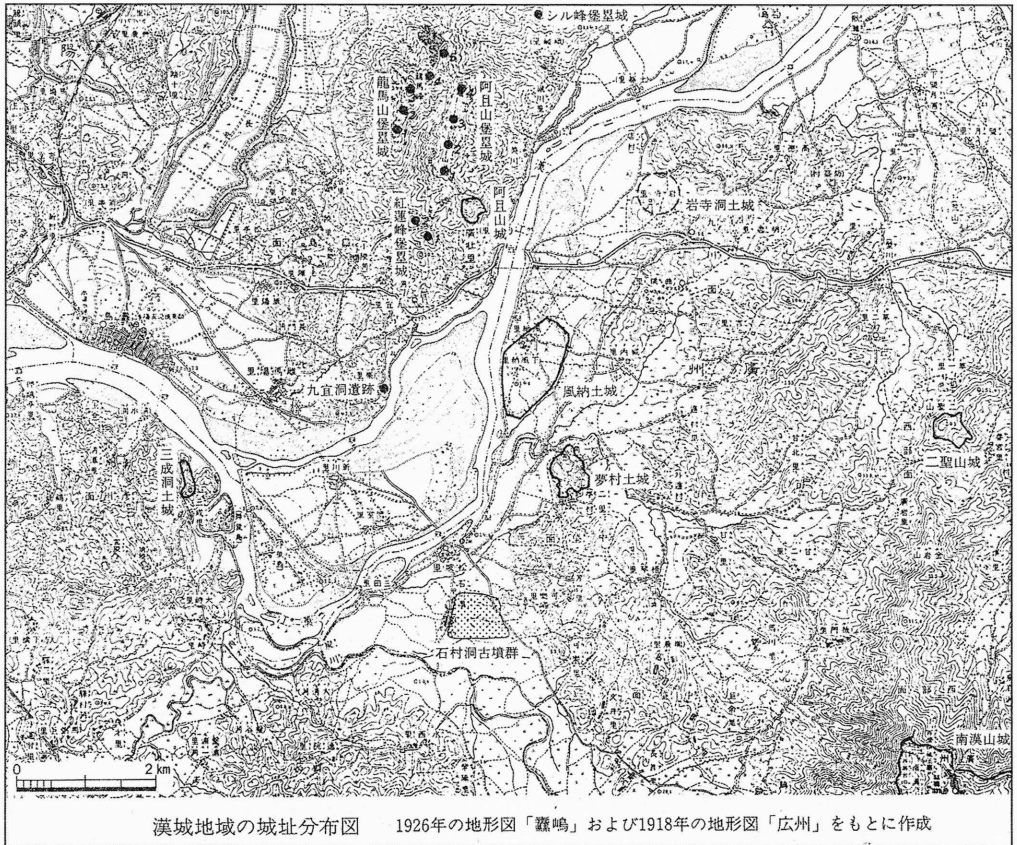


図6 漢城地域の城址分布図

さて慰礼城・漢山城の候補地であるが、江南には王陵を含むとみられる石村洞古墳群があり、それに近いところで、二つの土城が知られている。風納土城と夢村土城である（図6）。『三国史記』の漢城陥落の際の記事に、北城と王の居城とみられる南城とが現れるが、その北城に風納土城を、南城すなわち王城に夢村土城をあてる考えが一般化している⁽²¹⁾。その理由は、両者の位置ばかりではなく、近年の発掘を通して、風納土城の城内で環濠聚落が確認され、環濠が3世紀前半～中葉に廃棄されたとみられること、すなわち城壁の築造はそれ以後、3世紀中葉から後半と考えられるようになったこと、および夢村土城も、出土した西晋代の銭文陶器片から、築造年代が風納土城と同時期と考えられること、などである。同じ時期に両城があるため、後者を王城にあてたのである。371年の遷都は一時的なものとして考慮に入れず、北城・南城の記事を大きなよりどころとして、ひとつの王城に限定したために得られた結論であるが、371年の遷都を認めるとすれば、漢城陥落時の、すなわち後半の漢城は夢村土城でよいが、それ以前は別のところに求める必要がある。

それを風納土城にあてても、年代的にはおかしくない。

わたしは、前半が風納土城、後半が夢村土城で、371年に移動があったと考えている。両城は併存してもいっこうにかまわないのである。ただし、風納土城の内部の調査の詳細が報告され、そうした見方と相容れないことが出てくるかも知れない。最終的な確認は、現在なお継続している発掘調査の成果を待つ必要がある⁽²²⁾。

風納土城は、ほぼ長方形で、ほんらい3,500mはあったとみられるが、1925年の漢江の洪水で西壁が流失し、南壁も開発でかなり失われた。

夢村土城は、自然丘陵を利用した不整形で、低いところや連結しないところには版築で城壁を造っている。周長は2,285mである。オリンピックの施設がその一帯に建設されることになり、1983年から発掘調査がはじめられ、遺構の確認によって89年まで継続し、その後はオリンピック公園として復元整備された。城内の発掘が高地帯に限られたため、検出された建物址も、地上建物址1、版築盛土台址1、竪穴建物址2、望台址4などであった。このうち特に注目されるのは、城内西南部の高台に立地する地上建物址で、地山に1mほど盛り土し、その上に側面2間、正面4間以上の根固め石が残る。柱間は側面3m、正面で5.5mほどである。王宮としてはこれが最も可能性が高い。東に約25m離れて版築盛土台址があるが、それは池をとまっており、苑地の中の台榭のあとではないかとみられている⁽²³⁾。

(2) 中期—熊津時代

前期王都は、475年、高句麗の侵攻を受けて陥落した。当時の蓋鹵王も殺され、百濟はいったん滅んだといってもよいが、王族がはるか南の熊津で再興した。『日本書紀』では再興を477年のこととするが、そのほうが正しいと考えられる。『三国史記』でも、その年に王宮を「重修」したとあるが、475年造営の王宮をすぐ2年後に修築するのはおかしく、これが初築であったと考えるべきであろう。

そのような事情で選ばれた中期王都熊津は、決して予定された都ではなく、急遽落ち着いた先であった。そのため、臨時的な王都といった性格が強く、その当初から本格的な都づくりをすすめるべき場所さがしも行われている。

熊津は現在の忠清南道公州市にあたる。市街地の北から西に錦江が流れているが、北側でそれに面した公山城が、王城と考えられる(図7)。西側には、武寧王陵で知られる宋山里古墳群がある。それにつづく丘陵が錦江にぶつかるところに艇止山があり、近年の発掘によって環壕・木柵列の中に大壁づくりの建物址がいくつか検出され、特異な遺構とされる。武寧王妃の殯に用いた建物ではないか、とみる意見もある。

公山城の城壁・内部は、1980年代に断続的に発掘が行われ、城内で最も平坦な、

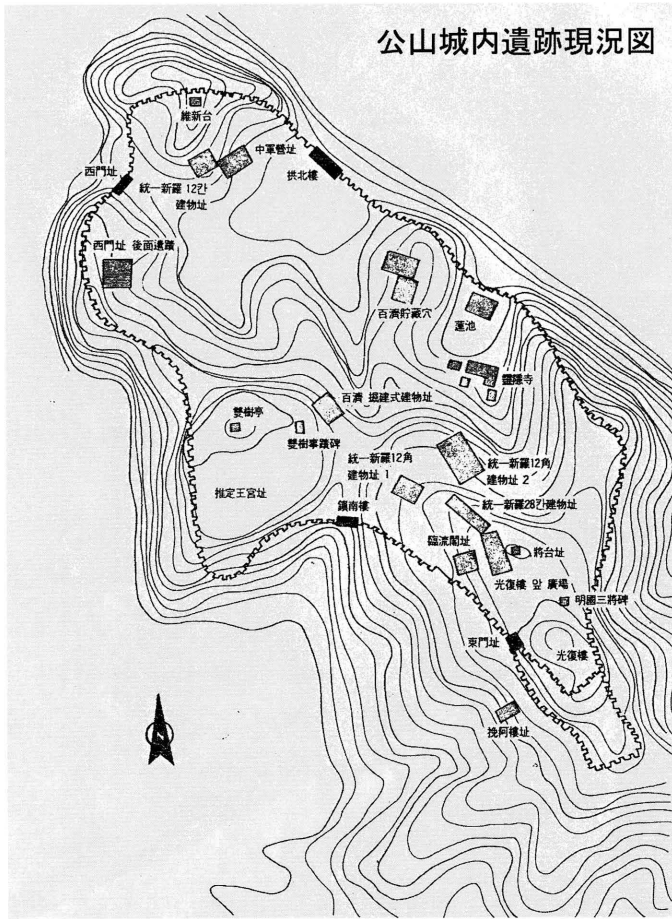
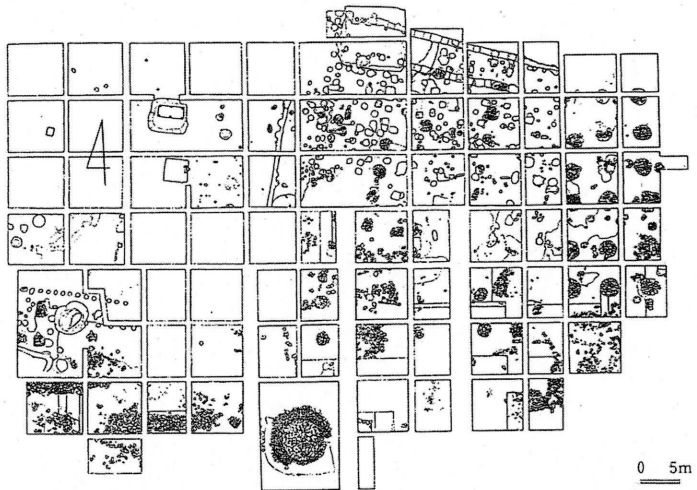


图7 公山城內遺跡現況圖

图8 公山城推定王宮址遺構圖



公山城推定王宮址遺構圖 (安承周『公山城百濟推定王宮址発掘調査報告書』公州師範大学百濟文化研究所 1987 より)

かつて公園運動場があったところが、王宮址と推定されている。掘立柱の建物址と礎石建物址が錯綜するかたちで重なり、いまひとつ明確ではないが、報告書では礎石建物のひとつを王宮の候補と考えている⁽²⁴⁾。その築造年代の推定は容易ではなく、その通り王宮でよいのかどうかは確言できないが、城内ではこの平坦地が最も有力であるとはいえる（図8）。

城壁は周長約 2,600m 前後であり、今は石築の城壁がめぐるが、ほんらいはほとんど土築であった可能性が高い。今も一部、土築城壁が残る。

熊津時代の王都に関して、最も重要な問題は、羅城の存否である。これは日帝時代に現地にいた軽部慈恩が、引き揚げ後に発表した論考の中で、住民の居住空間を大きく取り囲む羅城が存在したことを主張したためであるが⁽²⁵⁾、その後、それを確認したものがいない。従って、現在は否定的な意見が大勢であるといえる。公山城のまわりにそれを補助するかたちの小さな山城があり、そこには城壁が残るが、それらはそれ自体で完結するもので、羅城の一部をなすものではない。熊津時代には羅城はなかった、と考えるのが妥当である⁽²⁶⁾。

（3）後期—泗泚時代

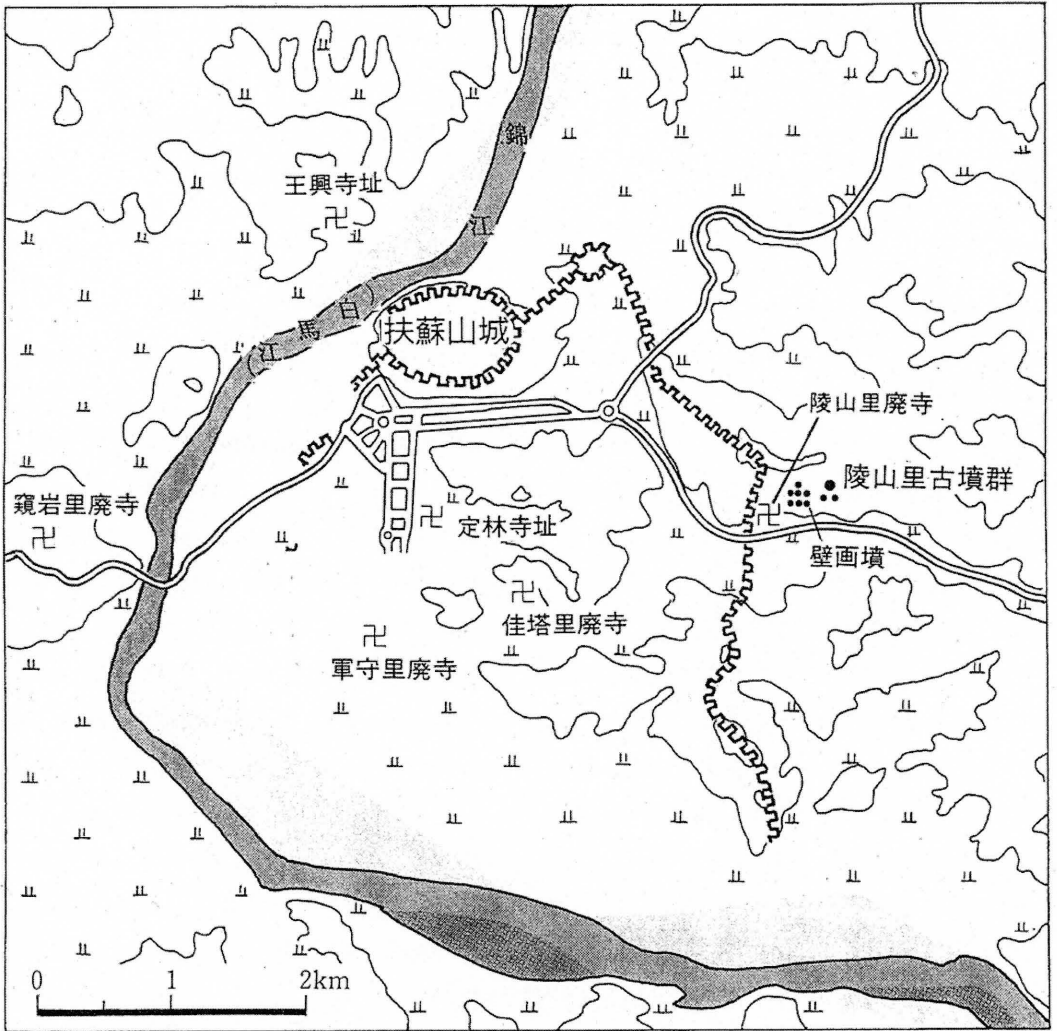
後期王都の泗泚は、現在の忠清南道扶余郡扶余邑にあたり、公州からは 30km ほどしか離れていない。熊津が予定外の都であったのに対して、泗泚は、計画的な王都であった。選地・下見を経て、遷都に先立って、王宮予定地の整地、王宮の築造、および王宮背後の山城の築造、さらには羅城の造営がなされたものと考えられる。背後の山城とは、扶蘇山城を指すが、近年の発掘を通して「大通」という刻印のおかれた瓦片が発見されている。「大通」は、中国梁の年号で、527～529 年にあたる。造営工事が、遷都前に進められていたことをうらづけるものである。

邑の北部、錦江に面して扶蘇山城がある。それが王城であるが、中期までと異なり王宮はその中ではなく、城外南側にあったと考えられる。ゆるやかな傾斜面を整地して、王宮および官庁を建てたようで、かつての扶余博物館（現、扶余文化財研究所）の東側および南側で発掘調査されたが、建物址、方形の池、道路遺構などが検出された。「北舎」という銘のある土器も出土した。近年は、それにつづく西側を、扶蘇山麓に沿う形で、発掘がつづけられており、大型建物址も検出されている⁽²⁷⁾。いまのところ、明確に王宮であるといえる遺構が確認されているわけではないが、このあたりに王宮があったことはほぼ間違いない。

百濟の滅亡は、唐・新羅の連合軍の攻撃によるが、その連合軍の泗泚侵攻について、中国の史書は「郭に入る」「城を囲む」という順で、王を降伏するに至らしめている。この「郭」が羅城を、「城」が扶蘇山城を指すことは間違いない。その間の王

宮・官庁の一带については、それを遮るものが史料に出てこないが、その一区画が特別扱いされたことは確かであり、おそらく築地のようなものはあったであろう⁽²⁸⁾。

泗泚城のそれまでと異なる点は、このように王宮が王城の外に出て、大きく囲む羅城ができたことである。羅城の発掘調査も進み、東羅城では、門址の推定位置と、その周囲部分が確認され、また門での祭祀と関連すると見られる木簡も見つまっている⁽²⁹⁾。ただし、西羅城は、かつてそう考えられてきたところが自然堤防であると確認され、全く無かったという意見もあらわれている⁽³⁰⁾。しかし、西側に全く羅城を造っていないというのは、たとえ錦江が自然の防御をなすとしても、考えにくく、



扶余の遺跡群（金元龍・西谷正訳『増補改訂版 韓国考古学概説』1984 より）

図9 扶餘の遺跡群

少なくとも扶蘇山城からつづく部分には、造られていたと考えておきたい（図9）。

羅城の中は、上下前後中の5部に分けられ、5部それぞれはさらに5巷に分けられた。宮南池とよばれる池の中から「西部後巷」と記す木簡が出土しており、その存在が確認されるようになった。部巷制であったということになるが、部は高句麗の影響を受けたものではないかと考えられるのに対して、巷は中国南朝の都建康にみられるものであり（ただし里巷制）、百済と南朝との密接な関係からすれば、その影響を受けたものとみてよい⁽³¹⁾。

泗泚にも条坊制が施行されたという意見もあるが⁽³²⁾、全体的な痕跡を確認できず、おそらく施行されなかったものと考えられる。建康も条坊制は施行されていないと考えられるが、その影響を受けたことが大きな理由であろう。

3. 新羅 二つの王京

新羅は、終始一貫して慶尚北道慶州市に王都が置かれた。『三国史記』では紀元前57年の建国とされており、滅亡は935年であるから、新羅王朝は千年近くつづいたことになるが、慶州は「千年の都」といわれている。当時は単に京都・王京・王都などの一般用語以外に金城・金京ともよばれた。

新羅は『魏志』にみえる斯盧国が前身であるが、その斯盧国の地が慶州盆地であった。5世紀末から領土的に拡大していくが、その場合、斯盧国の人々は自分たちを王京人として意識するようになった。斯盧国には有力な六つの村があったが、それが六部に転化し、行政区分になっていた。その六部人が旧斯盧国の人であり、かつ王京人になったのである。6世紀初めから京位・外位という官位の二重体系をもつようになるが、京位は王京人にのみ与えられ、地方人は外位しか認められなかった。そこには大きな格差があった。つまり新羅における王京は、もとの斯盧国の地そのものであり、その全体を王京とよんだのである。これを六部人の王京、六部王京とよぶ。王京人は、骨品制という新羅の独特な身分制の身分を持ち、全体として地方人を支配したが、それが新羅の支配構造であった。

しかし最後まで、そうした王京のあり方をしていたわけではなかった。慶州に地割りの痕跡があることは古くから知られていたが、それが条坊制の名残であると指摘したのは地理学者の藤田元春で1929年のことであった。その後、地籍図などを通して、条坊の復元がなされたが、新羅で最も重要な国家寺院である皇龍寺址の発掘を経て、その外郭部分の調査が継続して行われ、まさに現代の畦・農道の下から、新羅の道路遺構が確認された。大路は幅13m、小路は幅5.5mで、大路間の心心間距離は約160mである⁽³³⁾（図10）。

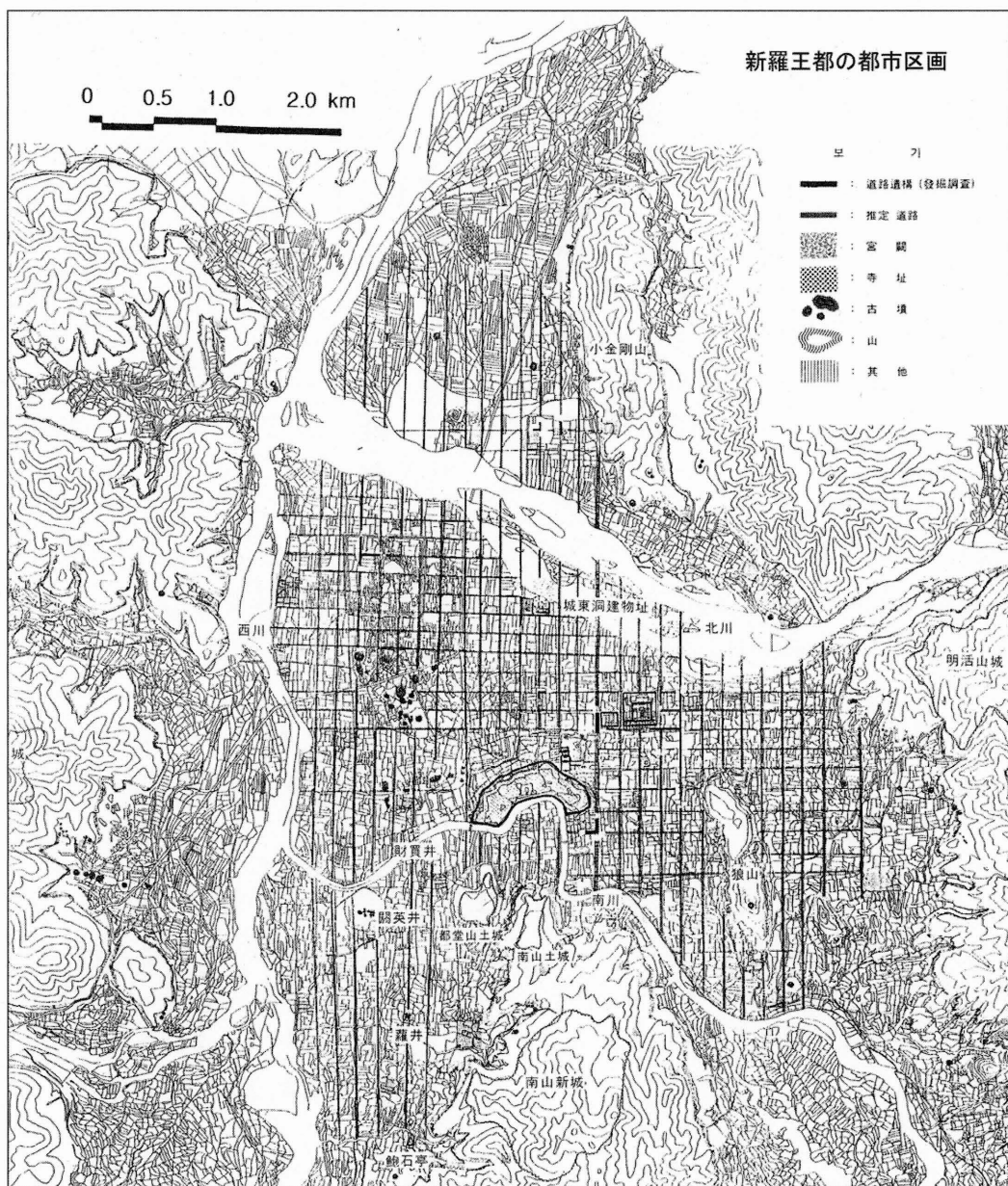


図 10 新羅王都の都市区画

この条坊制は、王都の大改造が行われた7世紀の後半から施行されたものと考えられる。百済・高句麗を滅ぼし、連合していた唐の勢力を駆逐して統一を達成した新羅は、伸張した王権にみあう新たな王都づくりを進めたのであるが、674年に宮内に池が掘られ（現在、雁鴨池。当時は月池）、679年にそれに隣接して東宮が造営され、ほぼ同じ時期に北宮とみられる城東洞の宮殿遺構も建てられたと考えられる。

新羅の王宮は、基本的に月城にあったと考えられる。月城は低い自然丘陵を利用し、土石混築の城壁を築いた、周長約 2,400m の城で、慶州市街の南側郊外にある。南側を南川が流れ、半月形をなすが、このような形態の城を月城とよぶ。「在城」ともよばれるが、それは「王の住まわれる城」という意味である。内部はまだほとんど発掘調査は行われていないが、レーダー探索による遺構の存在確認はされており、いくつかの建物があつたことが知られている⁽³⁴⁾。また、北側にあつた濠やその外側の調査は現在も進められている。そこでは4世紀頃の竪穴住居址が検出されており、王宮としての使用はそれ以後とみられる。濠は7世紀後半に埋められ、機能を失つた⁽³⁵⁾。それは濠が内外を区画するものではなくなったということで、もう少し広い範囲を王宮区のように設定したためではないかと考えている⁽³⁶⁾。月城を中心に東宮などを含む範囲であり、王京大改造の一環である。

さてこのように、すでに広い範囲の王京（六部王京）が存在したにも拘わらず、その地を動くことなく、その中のごく一部の地域に新たな王京を設定したのである。慶州を離れることができなかつたのは、その支配構造の特殊性による。そうした新たな王京設定には六部人の抵抗が想像される。新羅の王京の場合、羅城がなかつたことが特徴のひとつであるが、それは視覚的に内外の区画を明示する施設が、六部人の抵抗で造りにくかつたためではないかと考えられる。また条坊制の痕跡は不整形に残るが、ほんらいのプランは、同じ理由から、機械的に線引きのできる方形であつたのではなからうか⁽³⁷⁾。ただしそのことが考古学的に確認されたわけではない。発掘がまだ部分的であり、京極も確認されておらず、論者によっては、一度に造られたのではなく、少しずつ段階的に造営され、不整形だつたのではないかとみている⁽³⁸⁾。この問題は、調査が進展すれば、解決することと思うが、最初からプランがなく、その都度拡大していったという見方に、違和感はある。こうして六部王京から王のための王京、条坊制王京が成立したのである。

この条坊制王京は、羅城は存在しないものの、条坊制を施行し、おそらく方形の京城をもち、また北よりに王宮があつた。形態的にも、高句麗・百済のそれぞれ最後の王都より、中国都城に近いといえる。特に、唐の長安を意識したものと考えてさしつかえない。時間的には最も遅れるのであり、完成形に近いものであつても、むしろ当然というべきである。

月城は、王宮区が広がつたものの、ひきつづき基本的に王宮であつた。東宮とか北宮という呼称は、月城を基点としている。とすれば、月城と北宮という二つの王宮が南北に配されるかたちになつたということになる。それはなぜであろうか。わたしは、唐制にのつとつた方形の京城を導入し、かつ月城を北に配するような都づくりが、月城のすぐ南まで山地（南山）がのびていることによって、実現不可能で

あり、そのために、唐制導入の理念型としての北よりも王宮を、別に造る必要が生じ、北宮の成立になったものと考えている。つまり月城という伝統と、北宮という唐制との折衷的な王都が、条坊制王京であった、ということになる⁽³⁹⁾。

おわりに

以上、朝鮮三国の王都について概観してみた。いずれも、当初、それぞれの伝統に即したかたちの都づくりをしていたものが、最後の段階になって（結果的に）、中国制を導入するようになっていく。高句麗長安城は北魏洛陽の、百済泗泚城は南朝建康の、そして新羅条坊制王京は唐の長安の、それぞれ影響を受けたものといえる。そして中国都城の差異が、それぞれのありようを規定した。ただしともに、伝統に制約されたかたちでの導入であり、そこに伝統と中国制導入との相克をみることができる。

さて日本の都城制との関係であるが、見てきたように、調査の現状は、精密なかたちでの比較に耐えうるようなものではない。きわめておおざっぱに言えば、百済と倭との関係は4世紀後半に成立して以来、ほぼ友好関係で終始したといえるから、日本の都城造営において百済の都が意識されたことは十分考えられる。飛鳥と泗泚城とが比較されることは多い⁽⁴⁰⁾。また藤原京のような条坊制の導入に際しては、日本は唐と通交していない時期であり、新羅との関係を想定する必要がある。羅城がないことなど似ている点もある⁽⁴¹⁾。ただし、直接・具体的な比較材料は、まだほとんどない、というのが現状である。

注

- (1) 遼寧省文物考古研究所編 2004『五女山城—1996～1999, 2003年桓仁五女山城調査発掘報告』文物出版社。
- (2) 田中俊明 1998「高句麗前期王都卒本の構造」『高麗美術館研究紀要』2号。
- (3) 梁志龍 1992「桓仁地区高句麗城址概述」『博物館研究』1992-1。
- (4) 閻毅之・林至徳（集安県文物保管所）1984「集安高句麗国内城址的調査与試掘」『文物』1984-1。
- (5) 田中俊明 1994「高句麗の興起と玄菟郡」『朝鮮文化研究』東京大学朝鮮文化研究室紀要創刊号。
- (6) 田中俊明 2008「魏の東方経略に関する問題点」『古代武器研究』9号, 古代武器研究会。
- (7) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館編 2004『国内城—2001～2003年調査発掘報告』文物出版社。
- (8) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館編著 2004『丸都山城—2001～2003年集安丸都山城

調査発掘報告』文物出版社。

- (9) 関野貞 1941 「高句麗の平壤及び長安城に就いて」『朝鮮の建築と芸術』岩波書店。
- (10) 小泉頭夫 1940 「平壤清岩里廢寺址の調査（概報）」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会。同 1958 「高句麗清岩里廢寺址の調査」『佛教藝術』33 号。
- (11) 金日成綜合大学考古学及び民俗学講座 1973 『大城山の高句麗遺跡』金日成綜合大学出版社。
- (12) チョンジェホン 1985 「安鶴宮遺跡に対する研究」『高句麗歴史研究』金日成綜合大学出版社。
- (13) 田中俊明 2004 「高句麗の平壤遷都」『朝鮮学報』190 輯。
- (14) ナムイルリョン・キムギョンチャン 1998 「清岩洞土城について（1）」『朝鮮考古研究』1998-2。
- (15) 蔡熙国 1964 「大城山一帯の高句麗遺跡研究」『朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学及び民俗学研究所遺蹟発掘報告』第九輯，社会科学院出版社，および注（11）所掲書。
- (16) 関野貞 1941 「高句麗の平壤及び長安城に就いて」『朝鮮の建築と芸術』岩波書店。
田中俊明 2006 「高句麗長安城の築城と遷都」『都市と環境の歴史学』第 1 集。
- (17) 田中俊明 1985 「高句麗長安城城壁石刻の基礎的研究」『史林』68-4。
- (18) 田中俊明 2006 「高句麗長安城の築城と遷都」，注（16）所掲。
- (19) 田中俊明 2005 「高句麗長安城の規模と特徴一條坊制を中心に一」『白山学報』72 号。
- (20) 田中俊明 1999 「百濟漢城時代における王都の変遷」『朝鮮古代研究』1 号。
- (21) 李道學 1992 「百濟漢城時代の都城制に関する検討」『韓国上古史学報』9 号。朴淳發 1996 「百濟都城の変遷と特徴」重山鄭德基博士華甲紀念論叢刊行委員会編『重山鄭德基博士華甲紀念韓国史学論叢』景仁文化社。
- (22) 現在までのところ，国立文化財研究所から 2001 『風納土城 I』・2002 『風納土城 II』・2005 『風納土城 V』が，ハンシン大学校博物館から 2003 『風納土城 III』・2004 『風納土城 IV』，2005 『風納土城 VI』・2007 『風納土城 VII』が刊行されている。
- (23) 夢村土城発掘調査団 1984 『整備・復元のための夢村土城発掘調査報告書』・夢村土城発掘調査団 1985 『夢村土城発掘調査報告』・ソウル大学校博物館 1987 『夢村土城 東北地区発掘調査報告』・ソウル大学校博物館 1988 『夢村土城 東南地区発掘調査報告』・ソウル大学校博物館 1989 『夢村土城 西南地区発掘調査報告』。
- (24) 安承周・李南爽 1987 『公山城百濟推定王宮址発掘調査報告書』公州師範大学博物館・忠清南道。
- (25) 軽部慈恩 1971 『百濟遺跡の研究』吉川弘文館。
- (26) 田中俊明 1989 「公州地方の王京と山城」東潮・田中俊明編著『韓国の古代遺跡 2』百濟・伽耶篇，中央公論社。田中俊明 2002 「百濟都城と公山城」『百濟文化』31 輯。

- (27)例えば申鍾國 2007「泗泚都城発掘調査の成果と意義」『福岡大学人文論叢』39-1 参照。
- (28)田中俊明 1990「王都としての泗泚城に対する予備的考察」『百濟研究』21 輯。田中俊明 1997「百濟後期王都泗泚城をめぐる諸問題」堅田直先生古希記念論文集刊行会編『堅田直先生古希記念論文集』真陽社。
- (29)尹善泰 2004「扶餘陵山里出土百濟木簡の再検討」『東國史学』40 号。
- (30)朴淳發・成正鏞 2000『百濟泗泚羅城』忠南大学校百濟研究所，同 2000『百濟泗泚羅城Ⅱ』忠南大学校百濟研究所。朴淳發・董寶璟・山本孝文 2002『百濟泗泚都城Ⅲ』忠南大学校百濟研究所。
- (31)田中俊明 1990「王都としての泗泚城に対する予備的考察」，注（28）所掲。
- (32)朴淳發 2003「泗泚都城空間区画予察」湖西史学会編『湖西地方史研究』景仁文化社。
- (33)国立慶州文化財研究所 2002『新羅王京 発掘調査報告書Ⅰ』国立慶州文化財研究所。
- (34)国立慶州文化財研究所 2004『月城 地表調査報告書』国立慶州文化財研究所。
- (35)国立文化財研究所慶州古蹟発掘調査団 1990『月城垓字 発掘調査報告書Ⅰ』国立文化財研究所。国立慶州文化財研究所 2004『月城垓字 発掘調査報告書Ⅱ』国立慶州文化財研究所。
- (36)田中俊明 1988「王京と山城」東潮・田中俊明編著『韓国の古代遺跡 1』新羅篇（慶州），中央公論社。
- (37)同前。
- (38)李恩碩 2004「王京の成立と発展」『28 回韓国考古学全国大会』韓国考古学会，黄仁鎬 2006「新羅王京の変遷—道路を通じてみる都市計画—」『東アジアの古代文化』126 号。
- (39)田中俊明 1988「王京と山城」，注（35）所掲。
- (40)例えば亀田博 2000「百濟泗泚城の比較研究」亀田博著『日韓古代宮都の研究』学生社。
- (41)千田稔 2004「古代朝鮮の王京と藤原京」千田稔著『古代日本の王権空間』吉川弘文館。